県出身デザイナーら「兄弟舎」結成　活性化応援する取り組み

12月18日（火）

小諸市の住民を紹介する「小諸町人鑑50」の試作品を持つ土屋和浩さん

東京で活動する県出身のデザイナー、編集者、建築士らが、県内各地の活性化を支援するグループをつくった。名付けて「ヤルダ兄弟舎（きょうだいしゃ）」。「ヤルダ」は「やるぞ」を意味する方言から。県内でまちづくり、農業、芸術活動などに携わる人を「兄」、県外から活動を応援する人を「弟」と位置付けて活動する。既に60人ほどの「兄」がおり、ネットワークが広がっている。

発起人は、佐久市瀬戸出身で東京都渋谷区を拠点にするアートディレクター土屋和浩さん（43）。「東京で得た経験や知識を生かし、長野をより良くしたい」と7月に呼び掛けた。都内に住む10人ほどが賛同し、8月初めに会合を開き、9月に設立した。

「弟」はインターネットで職業や得意分野を公開。仕事で身に付けた知識や技術、人脈を生かして「兄」を手助けする。緩くつながるため代表者は置かず、地域おこし活動ごとにグループをつくる。「兄」から「弟」への報酬は「無償でも成功報酬でも物々交換でも、互いが納得できれば良い」としている。

土屋さんの場合、県出身・東京在住の写真家やフリーライターと一緒に、小諸市に住む人を紹介する本「小諸町人鑑（ちょうじんかがみ）50」の発行を計画している。「兄」は同市商工観光課の土屋政紀さん（54）らだ。「兄」がリンゴを生産する家族や老舗旅館を営む夫婦など、生き生きと暮らす小諸市民を紹介。「弟」は10月からインタビューを重ねている。「魅力ある人々を知って移住を検討してもらいたい」（土屋和浩さん）との狙いだ。

北安曇郡小谷村では、新潟県出身・同村在住の写真家前田聡子さん（30）の活動を支援。来年6月に都内での個展開催を目標に準備を進める。個展の中で、村の食べ物などをPRするパーティーを開くことも検討している。

その他、空き古民家に新しい交流拠点づくりを計画している小谷村大網地区の住民や、佐久地方でデザインを通じたまちづくりに力を入れるグループ「D39（でぃーさく）」などにも声を掛けてきた。京都府からも「弟」志願の声が寄せられるなど、着実に根を張っている。

土屋さんは「長野が好きな人はどんどん参加してほしい」と呼び掛けている。問い合わせは土屋さん（電子メールkaz@yaruda－kyoudaisha. com）へ。